

久留島武彦と「朝鮮」

金, 成妍

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/11022>

出版情報 : 九大日文. 9, pp.2-15, 2007-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



久留島武彦と「朝鮮」

KIM
SUNG-IL
成 妍

一 はじめに

一八七四（明治七）年六月一九日、豊後森藩（現在の大分県玖珠郡玖珠町森）の旧藩主家の久留島通寛の長男として生まれた久留島武彦（一八七四〜一九六〇、以下久留島と表記）は、一九〇三（明治三六）年七月一日、日本初の童話会である「お話の会」を、同年一〇月には川上音二郎、貞奴夫妻と共に日本初の「お伽芝居」を開催した。その後「お伽倶楽部」（一九〇六年三月）を発足、日本初の専門児童劇団である「東京お伽劇協会」（一九〇七年三月）を手掛けた。

その他にも、玩具研究会の「小児会」（一九一〇年一月）、童話研究会の「回字会」（一九一〇年四月）、婦人研究会の「母の会」（一九一〇年五月）、話し方研究会の「日本童話連盟」（一九二四年一〇月）を創立し、「日本国民童話協会」（一九四一年六月）と「日本小国民文化協会」（一九四二年五月）を結成、日本青少年文化センター（全日本移動教室連盟）の初代所長（一九五二年六月）に就任した。また、日本ボーイスカウトの創始者であり、「子どもの日」の提唱者でもある。

さらに教育活動にも精力を注ぎ、一九一〇（明治四三）年五月、

東京府豊多摩郡千駄谷町字穩田四番地に早蕨幼稚園を創設した^①。一九一五（大正四）年には東京の代々木に早蕨第二幼稚園を開設する程、幼稚園は盛況であった。しかしこの幼稚園は、一九四五（昭和二〇）年五月の東京大空襲によって焼失する。この間、幼稚園の経営者として教育に携わっていた。

児童文化事業の中で、久留島が晩年まで最も精力的に取り組んだのは口演童話活動であった。一九〇六（明治三九）年九月、博文館に入社し、『少年世界』、『少女世界』の講話部主任となった久留島は、『少年世界』の主筆を務めていた巖谷小波とコンビを組み本格的に口演童話活動を始める。爾来、口演童話活動を生涯の仕事とし、一人で最後まで歩むこととなった。このような実績に裏付けられて、現在久留島は、口演童話家であり雄弁術家であると同時に児童文化事業の先覚者として位置付けられている。

しかし、久留島の活躍は口演童話活動を中心とした児童文化運動のみならず、執筆活動が多方面に及んでいたことに特長を見出せる。一八九五（明治二八）年、『少年世界』に投稿した「近衛新兵」を皮切りに「戦争物語」を書く一方、一八九六（明治二九）年から早くも創作童話を発表し続けた。童話の他にも、脚本・話術論・雄弁術論・外国見聞録・教育評論・随想・講演脚の記録・紀行文など、各種ジャンルの注目すべき作品を数多く発表した。しかしながら、今日まで久留島に関する研究は、口演童話家または児童文化事業の先覚者としての評価に片寄っているのが現状である。このような評価は、久留島の出身地で

ある大分県玖珠町による郷土偉人としての研究が主となつてきた経緯に因ると言えよう。

一九五〇（昭和二五）年五月五日子どもの日、大分県玖珠町の三島公園で童話碑除幕式を兼ねた第一回日本童話祭が行われた。それ以来、日本童話祭は毎年五月五日、玖珠町と大分県教育委員会の主催で開かれている。現在は日本最大の子ども祭りとなり、町には「久留島武彦史料館」や「わらべの館」が建設され、二〇〇一（平成一三）年には、大分県教育委員会による『大分県先哲叢書久留島武彦資料集』全四巻が出版されるに至つた。ところで、以上のような概要からはもちろんのこと、久留島の先行研究のどこからも朝鮮との接点は見当たらない（拙稿「久留島研究資料目録・年譜『韓国言語文化研究』第一三三号参照。二〇〇四年に出版された大分県立先哲史料館編・後藤惣一著の『久留島武彦』^②に掲載された年譜から確認できる朝鮮関連事項は、次の二点のみであった。「一九〇四（明治三七）年、仁川港に上陸し、司令部の命令で北韓軍に配属となる。一九一八（大正七）年、朝鮮新聞社招聘により韓国で講演行脚（三三日間）を行う」。日露戦争に従軍した久留島は、一九〇四年二月から一九〇五年九月までのおよそ一年八ヶ月を朝鮮半島で過ごした。それに加え筆者は、『京城日報』、『毎日申報』、『東亜日報』、『朝鮮日報』などの資料から、久留島の朝鮮口演旅行に関する確認調査を行った。その結果、久留島が一九一五年、一九一七年、一九二三年、一九二六年、一九二七年、一九二八年（五月と六月の二回）、一九二九年に口演のため朝鮮を訪問していたことが明らか

かになった。筆者の調査では、一九一八（大正七）年に久留島が朝鮮を訪れた記録は確認できなかった（拙稿「久留島武彦の朝鮮口演旅行」『韓国言語文化研究』第一四号、二〇〇七年春刊行予定。これらの先行研究を踏まえたうえで、さらに久留島と「朝鮮」との接点を追究することを本稿の目的とする。

九年間離れていた信仰を取り戻す場となつたのも「朝鮮」であり、戦場ルポを発信する一方で異文化を観察する視線を確立したのも「朝鮮」という場での出来事であつた。朝鮮の風習のなかでも、久留島の関心は常に「児童」という一点のみに絞られていた。朝鮮の産児風習、朝鮮児童の遊び文化及び玩具などについて詳細な記録を記している。

久留島にとつて「朝鮮」という場における「朝鮮児童なるモノ」への関心は、児童観念を再認識させるとともに、児童文化事業への「信念」を与え、ひいてはお伽俱樂部の構想に到る契機となつた。そして、一生をかけて語り続けた自分の口演の中にも、その「朝鮮なるモノ」を取り入れていた。そこで本稿では、久留島の「朝鮮」体験を明確にした上で、久留島によつて描かれる「朝鮮」という場のなから久留島を再編成することを試み、久留島と「朝鮮児童なるモノ」との関わりについて考察したい。

二 朝鮮に來た「尾上新兵衛」

予備を召集され、後備も召集され、廿七八年戦役の従軍徴

章と、北清事變の従軍徽章と、金鷄勲章と金米糖（瑞宝章の事）と、騎兵刀と徒歩刀と軍馬と車輛とが入違ひ、行く、来る、走るの忙しい間に、何処と無く天地悠々たる顔で、頸には巻手巾の袴のボタンは一つもかけず、中からは如何はしひ袴下やら襦袢の裾やらをのぞかせて、引ずる様に十文半の軍靴を運ばせて居るのは、今迄の戦地にも、師範所在地にも一向に見慣れぬ兵種だと、誰も一度は振返へて見る新参兵がある。

この文章は一九〇四（明治三七）年二月、朝鮮という場の上陸した久留島が初めて発信した「補助輪卒」の冒頭である。兵營社会を、久留島特有の明るくて愉快なスケッチで綴った戦場ルポである。久留島の執筆活動の端緒も戦場ルポであった。日清戦争に従軍した久留島が戦地から投稿したものが『少年世界』の七月号から四ヶ月間、「近衛新兵」の題で連載され、これが処女作となったのである。

一八九九（明治三二）年、『少年世界』に連載された久留島の台湾征討作戦の体験は、翌年一月六日、単行本『戦塵』（博文館）にまとめられた。戦場ルポとなる『戦塵』は、遼東半島から台湾へ向かう「船中の淨瑠璃」をはじめ、全一話で構成されている。タイトルの『戦塵』には「軍事小説」と付され、尾上新兵衛の名で発表された。これら一連の初期作品は、従軍兵による日本初の通信であり、戦場ルポルタージュ文学の先駆ともいえる。一八九五（明治二八）年から始まった久留島による

「戦争物語」の掲載は、一九〇六（明治三九）年まで、一一年間続いた。朝鮮で発信した戦場ルポは、その線上にあるといえる。

一九〇三（明治三六）年一月、東京中央新聞社に入社した久留島は、日露戦争を目前に、新聞社の社長から韓国の京城への特派員を命じられる。しかし、後備の兵籍があつたため、召集されたら即時応召ができないという理由で京城行きを諦める。その代わり、佐世保軍港の特派員として一九〇三年の二月末、佐世保に派遣される。佐世保で新年の艦隊遙拜式を見守つた後、一旦東京の本社に戻るが、一月二日、本社からの電令で舞鶴港に向かう。二月、取材のために滞在していた対馬市美津島町竹敷で日露戦争の動員令を受ける。東京の自宅に帰る余裕もなく、召集令状を受け取つた翌朝（一九〇四年二月五日）、竹敷から召集地の小倉まで直行する。

第一二師団三二連隊兵站幹部の糧餉部へ配属され、門司港から乗船し韓国の仁川港に上陸、濟物浦の糧秣倉庫で働くことになる。一九〇五（明治三八）年五月、司令部の命令で混成師団の北韓軍に配属されて北上、咸鏡北道の富寧に滞在する。八月三〇日富寧を発ち、三十一日に芽山嶺を越えて須峰洞に進入する。昌斗嶺戦を皮切りに五峯山、鳳儀山での激戦のあげく会寧を占領し、休戦に入る。九月は圖們江畔子仁洞に滞在。一〇月満州に入つて遼陽に滞陣、沙河に進んで駐屯している際休戦を迎え、一九〇五年一月一日に帰還する。

久留島が朝鮮半島で過ごした期間は、一九〇四年二月から一九〇五年九月までのおよそ二年八ヶ月であつた。仁川（韓国、

以下同じ)で一年三ヶ月、咸鏡北道(北韓、以下同じ)で五ヶ月滞在した。その間書かれた作品は次のとおりである。①から⑦までが仁川で書かれたものであり、その他は咸鏡北道で書かれたものである。兵營生活の様子を発信しつつ、その一方で朝鮮の風習や児童文化を観察し、「朝鮮の産児奇習」「朝鮮児童の遊戯」といった文章を寄稿していた。

- ① 「補助輪卒」「日露戦争実記」四号、一九〇四(明治三七)年三月一日
- ② 「海戦前の宴会」「日露戦争実記」五号、一九〇四(明治三七年)年三月二三日
- ③ 「糧餉部」「中央新聞」一九〇四(明治三七)年三月二五日
- ④ 「戦場便り」「少年世界」一〇巻一号、一九〇四(明治三七年)年八月五日
- ⑤ 「戦場便り」「少年世界」一〇巻二二号、一九〇四(明治三七年)年九月一日
- ⑥ 「嬉し! 恤兵品」「日露戦争写真画報」第八巻、一九〇四(明治三七)年一月八日
- ⑦ 「朝鮮の産児奇習」「文芸倶楽部」一一巻七号、一九〇五(明治三八)年五月一日
- ⑧ 「前哨線の俳句会」「中央新聞」、一九〇五(明治三八)年六月二日
- ⑨ 「前哨線の俳句会」「中央新聞」、一九〇五(明治三八)年六月三日

⑩ 「前哨線の俳句会」「中央新聞」、一九〇五(明治三八)年六月六日

⑪ 「陣中の重喜会」「基督教世界」一一五六号、一九〇五(明治三八)年一月九日

⑫ 「朝鮮児童の遊戯」「少年世界」一一巻一四号、一九〇五(明治三八)年一月一日

①から⑥までの作品は、兵營生活の紹介が主なテーマである。①から⑥を通して、逸話を中心に朝鮮での兵營生活を覗いてみる。

一九〇四年二月、「始て外国の土地を踏で、『強う子供までが朝鮮言葉を利用に話しよります』と、其の不明の言語に驚愕の魂をおつ潰させて居る」(補助輪卒)新兵たちと共に、久留島は仁川で兵營生活を始める。配属された仁川の糧餉部には、久留島を含めて下士が三人、上司には部長と部員と将校が二人いた。「朝の七時から埠頭と倉庫と集積場と碇泊場司令部との間を、車両と韓人夫と立混つて駆回つて居る」、その糧餉部の「勤務が激しいからと云ふので、菊寿と銘打た四斗樽が特に監本部から一樽支給」されていた。激しい仕事に比べ給料が安い輪卒のために、久留島は自分の給料を削って牡丹餅を拵えてあげたりする。その結果、久留島が宿舎のお風呂に入る度に補助輪卒が飛び込んできて、背中を流してくれる(糧餉部)。

咸鏡北道に北上し、会寧を占領した後休戦に入っていた一九〇五年五月、部隊では、一頭七〇円する牛を三頭購入し、屠殺

しても差し支えないものか獣医の検査を受けることにした。その任務を任された久留島は、韓人夫一人と一緒に牛を引つ張つて、一里離れた砲兵連隊の舎营地まで行く。牛に異常がないという確証を韓人夫に渡した久留島は、宗匠になった気分です俳句を作りながら自由時間をゆつくり楽しんだ後、午後一〇時に帰隊する（前哨線の俳句会）。また八月には、公務をもつて「仁川、鎮南浦、平壤、安州、義州、龍巖浦の各地を経、鴨緑江を渡つては九連城、安東県の新戦場を視察し一箇月の日子を費して再び韓城の舎營に」（戦場便り）帰つた記録も見える。

これらの戦場ルポは、あくまでも明るく愉快に兵營生活を描いている。かつて日清戦争に従軍した久留島は、「近衛新兵」という作品を通して元気で明朗な「尾上新兵衛」というキャラクターを作り上げた。「若し夫れ少年諸君の中に、其実況を知らんと欲する者あらば、遠慮無くやつて来玉へ、固パンでも南京豆でも、僕が驕つてあげやうわい。」⁽⁴⁾と威勢よく呼びかける尾上新兵衛がいる兵營社会とは、厳しい軍律に束縛されながらも闊達な空気に包まれた空間である。上記で瞥見したように、それは朝鮮で発信した通信でも変わらない。

ところが、あくまでも明朗な「尾上新兵衛」を務めてきた久留島が、「朝鮮」という場に身をおいた時、「尾上新兵衛」ではない「久留島」としての素顔を垣間みせる。

三 「久留島」の自分探し

久留島は、一九〇四年二月から一九〇五年九月までのおよそ一年八ヶ月を朝鮮で過ごした後、満州に移動する直前（一九〇五年九月三日）に、「尾上新兵衛」ではない、「久留島」としての心境を語つた文章を残している。『基督教世界』（一一五六号、一九〇五年一〇月九日）に掲載された「陣中の重喜会」から、「久留島」の姿を具体化してみよう。

自分が信仰の道から離れて社会に立つ事既に九年間神は様々の機会を用ひて吾を再度も招き玉ふたが可成立歸らない方針を故意にとつていろいろと其の恵みの網をくぐり抜けやうと為たが如何しても許され無い。（略）然るに屢々矛盾が出て来る自家衝着は相次で起つて来る而てその快を受る者は自分である。苦しむと思ふ繩は自縛の繩で此の解結は一己の信念の立場にあるのだ斯と知て来ると尚もがいて抜けて見たくなり断じて破つて見たくなり益々努めれば努めるだけ瞭然と吾が屈服の日の愈々近づきつつある事を意識するのだ残念で残念で耐ら無い何等か機を見出して一切如是の拘束から脱する事は出来まいかと少なからず苦んで居る時今回の戦役となつた

キリスト教との出会いは、久留島の少年期にさかのぼる。久留島は、森小学校に通つていたころから、農学者でありキリス

ト教を指導していた津田仙による『学農雑誌』（一八七六年創刊）を愛読し、牧畜業に興味を持つ。大分中学校に入学（一八八七年四月一日）した後には、アメリカに行き牧畜業を学ぶことを夢見る⁵⁾。そこへ、英語の教師としてウエンライト⁶⁾が大分中学校にやってくる（一八八八年）と、一四歳の久留島は自ら申し出てウエンライトの家に寄寓し英語を学ぶ一方、キリスト教に感化されて洗礼をうけた（一八八八年九月二六日）⁷⁾。

村上謙介の『ウエンライト博士伝』には、「久留島氏の祈祷生活は、無邪気で真剣なものであった」⁸⁾と記されている。同書によると、久留島が「一再ならず博士（ウエンライト―筆者注）に、森の旧宅に残つて居る彼の母親が、神の救いに預れるだろうかと尋ね」、ウエンライトは「た祈れとばかり勧めていた。すると久留島は忠実に母のために祈り、ウエンライトを訪れる客をそばに招いては、母の救いのために祈つてくれと求めていた。このような久留島の祈祷によつて後に母もキリスト教徒になったという逸話がある。この逸話のなかには、母のために必死で祈る一四歳の久留島の姿がある。

久留島は、大分美以協会会員名簿の族籍に「華族」と記録されている。祖父道靖は久留島藩第一二代の当主であった。父は通寛。母恵喜は、中津奥平藩の家中、奥平丈右衛門（中金奥平家の第八代当主）の七人の次女であった。久留島の父通寛が病弱だったため、本家の一三代目の跡目（明治二年〜大正八年までの三九年間）を相続したのは、次弟の通簡であった。豊後森藩最後の藩主であった久留島の祖父通靖は、一四代目を通寛の長

男である武彦と決めていた。しかし通寛が早世すると、通寛の次弟通簡の子健三郎が跡を継いだ⁹⁾。この廃嫡¹⁰⁾によつて、久留島母子は宗家との苦しい葛藤を余儀なくされた。

関西学院に赴任するウエンライトの誘いをうけて、関西学院に移つて勉強していた久留島は、父通寛が他界（一八九一年三月二五日）したことで子爵である宗家と対面する。異教を奉ずるのは家系の名誉をけがす行為だとキリスト教に反対した宗家は、河野水軍の末裔である誇りのもと、久留島を東京の攻玉舎海軍予備学校に強制入学させる。関西学院の学籍はそのままにして攻玉舎に通つた久留島は、一〇ヶ月後、進級試験を放棄して関西学院に戻る。久留島を家系の競争者として警戒していた宗家は、いい口実と機会を掴んだかのように、久留島には一言の通告もせず子爵家から除籍し、学資支給まで断つてしまう¹¹⁾。

再び関西学院に戻つた久留島は、神戸の三宮神社前に立ち二ヶ月間街頭伝導を行つたり、広島伝導旅行に出かけたり、神戸美以教会の日曜学校主宰者を務めたりして、前にも増して信仰生活に精力を注いだ。このような信仰生活は厳しい苦学と並立してのことでもあった。

子爵家から除籍された後も宗家に留まつていた母と妹からは、泣訴の手紙が届く。宗家の残酷な処置に憤激した久留島は、母と妹を神戸に呼び寄せるために、神戸市在住の外国人に日本語を教えるアルバイトや、教会図書館で教室用聖書地図や参考図絵作りの手伝いなどで稼ぎ、一九歳にして常に母と妹への扶養責任を感じ、生計を立てるために工夫をしていた。二〇歳に

なり卒業試験を目前にひかえた久留島は、職を求めていたところ、植村正久から『福音新報』の編集係を提案されて東京に向かう。その途中立ち寄った箱根の旅館で兵士合格通知書を受け取り、入隊した。つまり、日清戦争に従軍するまでの久留島は、宗家に対する憤慨と母や妹への扶養責任という重荷のなか、その救いをキリストに向けて必死に祈りつづけていたのである。

次に、「信仰の道から離れて社会に立つ事既に九年間」（陣中の重喜会）と語る、その「九年間」にわたる久留島の姿を追ってみる。日清戦争に従軍した頃から日露戦争に従軍するまでの時期がその「九年間」にあたる。

熱心なキリスト教徒だった久留島は、日清戦争の勃発で東京近衛師団歩兵第一連隊に入隊（一九〇四年二月一日）し、三年間の兵役勤務を終えて一八九七年暮れに除隊する。その間、『少年世界』に連載された「近衛新兵」で一躍有名となり、『少年世界』を中心に戦場ルポを書き続ける。台湾から帰還（一八九五年二月）した後、三等書記に任命され管外居住許可を得た久留島は、近衛師団の糧食部に通勤することになる。この頃（一八九六年）から交流を始めた巖谷小波の家に下宿し、文学研究会である木曜会を立ち上げるなど、文人としての仲間入りを果たす。

しかし、文人として安住するには久留島の重荷は大きく、「苦しむと思ふ繩」は根深かった。五ヶ月ほどで巖谷小波の家を出た久留島が、神戸の母と妹を呼び寄せて一緒に過ごしたのが一八九六（明治二九）年のことである。翌年には妹を結婚させると

同時に、久留島も結婚⁽¹²⁾をする。そしてその年の暮、除隊を迎えた。

久留島が資本家を目指して奮闘したのはそれ以降のことである。除隊によって自由の身になり扶養家族が増えたことは、「酷薄な処置をなした宗家に仕返す近道は富者となることだ」⁽¹³⁾と考える久留島の気持ちに拍車をかけたと思われる。なるべく信仰の道には帰らない方針を「故意」に立てたと語るその理由は、ここにあるのではないだろうか。目まぐるしいとも言える転職の経歴がそれを物語っている。

信仰の道から離れて社会に立つ「九年間」の職歴を以下に列記する。

- ① 一八九八年、神戸新聞社（二年間） ↓ ② 一八九九年、「軍事彙報」の編集（六ヶ月間） ↓ ③ 一八九九年、横浜セーブル商社 ↓
- ④ 一九〇〇年、日本郵船会社に入社し上海支店長秘書として上海行き ↓ ⑤ 一九〇一年、大阪毎日新聞社（二年間） ↓ ⑥ 一九〇三年、海門商会（二〇ヶ月間） ↓ ⑦ 同年、横浜貿易新報社 ↓ ⑧ 一九〇三年末、東京中央新聞社

三年間の兵役を終えた後、たったの五年間で八種にもなる様々な職を経験している。三年契約で入った軍事彙報社は六ヶ月で経営破綻になり、庫番で主に羅紗と鉄を取り扱った横浜セーブル商社は昇進の見込みが見えず辞退、一攫千金の夢を抱いて渡った上海では突如勃発した北京義和団事件によって会社が閉鎖

されてしまう。希望に満ちて足を踏み入れた上海だったが、一週間一〇銭銀貨一枚で過ごす悲惨な思いだけを体験し、虚しく日本に帰った。日本に戻ってからも久留島の実験は続いた。一時期新聞社に勤めてはみたものの、資本家への野望は捨てきれず、本田貞介が横浜に設立した「海門商会」に入社する。貿易会社を取り扱う関税商品の窓口サービスマンを行っていた（いわゆるカスタム・ブローカー）海門商会は、ほんの一〇ヶ月で倒産してしまつた。

このような試行錯誤を繰り返しながら、「もがいて抜けて見たくなり断じて破つて見たく」なる気持ちとは裏腹に、「益々努めれば努めるだけ瞭然と吾が屈服の日の愈々近づきつつある事を意識」せざるを得なくなり、自分を縛り付けている縄をくぐり抜けようとすればするほど「矛盾が出て来る自家衝着」に遭遇するのであつた。

しかし、久留島は、自分を苦しめる縄は「自縛の縄」であり、その「解結は一に己れの信念の立場にある」と語る。「陣中の重喜会」には、咸鏡北道富寧に滞在していた時、軍曹小林角一と安藤勝利、そして富寧の兵站司令官として着任した歩兵少佐宇野重喜と共に、重喜会と名付けた小集会を開き、信仰を深めた話が記されている。

陳中に讚美歌を響かせ、軍服に隠した小型聖書を毎日読む熱心な祈祷生活ではあるが、一四歳から二〇歳までのような、「無邪気で真剣」なそれとは異なっていた。「無邪気で真剣」に祈り続けた久留島にはなかつた「信念」なるものが、そこには生

じていたのである。その「信念」なるものとは、「児童文化事業」への思いであつた。

日露戦争に従軍する一年前、横浜貿易新報社に籍を置いていた久留島は、妻が生活費を削つて支援してくれた資金三〇〇円と、巖谷小波と木戸忠太郎の協力のもとに、一九〇三（明治三六）年七月一日土曜日、横浜蓬萊町メソジスト教会で第一回の「お話の会」を開催した。子どもの話会というのは仏教会にはなく、教会にサマー・スクールがあつただけであつた当時の日本で、久留島による「お話の会」は初めての童話会であつた。

大成功をおさめた「お話の会」は毎月開催することになる。

「お伽芝居」⁽⁴⁾まで手掛け、多忙になつた久留島は横浜貿易新報社を辞めるが、生活費のため、再び職を求め東京中央新聞社に入社した。「お話の会」は七月、八月、九月、一〇月と続いたが、一一月になると日露の情勢が悪化し、一二月になつて久留島が佐世保に派遣されたため、次第に中止されていった。

「お話の会」は、久留島にとつて初の児童文化事業への試みであつた。実際に携わつた期間は一年にも満たなかつたが、その活動は、「自家衝着」に陥り迷子になつていた久留島を導く、ある方向を提示したと推測される。その方向とは、決して真新しいものではなかつた。すでに久留島が向かつていたところでもあつたのである。

『少年世界』に「近衛新兵」を投稿していたころから、久留島は童話を発表していた。一九〇三（明治三〇）年まで久留島が発表した作品は約九三編あるが、そのなかで童話は二六編ある。

童話を発表した期間は、一八九六（明治二九）年二月一日（『お鼻の喇叭』『少年世界』二巻三号）から一八九八（明治三一）年一二月一日（『草鞋談』中ノ二・下『少年世界』四巻二七号）までに集中している。二六編のうち二四編がこの期間に発表された。

この期間の久留島というと、台湾から帰還（一八九五年一月）した後、営外居住許可を得て、巖谷小波の家に下宿しながら近衛師団の糧食部に通勤していた時期である。木曜会を立ち上げて文人としての空気を吸い込んでいた、まさにその時期である¹⁵⁾。文人の空気を吸い込んだ身を最初に向けたところが、童話というジャンルだったことに注目しておきたい。

しかし、前述したように久留島は文人として安住することができなかった。久留島が信仰の道から離れて社会に入っていくば行くほど、童話も久留島から離れていった。「軍事彙報」に関わったところ（一八九九年）から、久留島による童話が発表されなくなったことが、これを裏付ける。上海から帰って一時大阪毎日新聞社に落ち着いた久留島は、大阪毎日新聞に最初の子ども欄となった「幼稚園」を、園長尾上新兵衛の筆名で担当する。海門商會に走ってしまったことでこの企画は長くは続かなかつたが、久留島が少しでも余裕を取り戻したときには児童関連事業を試みたことを裏付ける貴重な経歴だと思われる。

「お話の会」を実現したことで、久留島は新聞社まで辞めて児童文化事業に専念しようとしたが、生活という現実にはぶつかかり、また新聞記者という職に戻らざるをえなかつた。そして間もなく、日露戦争に従軍。繰り返された事業の失敗に続き、今

度はやつとの思いで実現した児童文化事業まで中断という形で挫折してしまつたのである。

「無邪気で真剣」な祈祷生活とともに成長した久留島は、信仰の道から離れ、社会に立ち入って九年という歳月を過ごし、今、朝鮮という場で、「当初の希望より云へば絶望の現在の立場より云へば思ひも設けぬ恵みに浴して此処に久し振りの重荷をおろす事となつた」¹⁶⁾と語る心境に落ち着くのである。それでは、久留島が「久し振りの重荷をおろす事となつた」、朝鮮という場の考察に入つてみる。

四 久留島にとつて「朝鮮」という場は

一九〇四（明治三七）年二月、久留島は第一二師団三三連隊兵站幹部の糧餉部に配属されて仁川港に上陸した。濟物浦糧秣倉庫の係りとして日本から運搬されてくる糧秣の受納と配給の事務を担当していた兵營社会から、朝鮮という外側に目を向けた時、一番初めに久留島の目に付いたのは「一体朝鮮人は迷信が深い」（『朝鮮の産児奇習』）ということであつた。以下、「朝鮮の産児奇習」を通して語られる、久留島の目に映つた朝鮮の風景を概観する。

朝鮮の人は、「何事を為すにも巫女を頼み、卜筮を頼み、鬼神を祭ると云ふ有様」で、日本とは異なつて「先づ祈るものは名山である、或は大川である、七星を祈る事もある、寺に祈る事もある、城隍と云つて、峠の登りと降りる境目に、積上げて

ある石の小山に願をかける」事もある。なかでも「最も不思議なのは井戸に祈請をかけ、竈に願をかける事である」と記す。

また、名山には必ず神がいるという考えから山に祈る場合が多いが、「何の神と云ふ当は無い。朝鮮人に聞けば只『山神』だ」という。城隍というものは、「朝鮮内地を旅行すると、屹度眼に着く物で、其が高くて低くても、峠であれば、其の頂には必ず有る」。「氣を付けて見て居ると、道行く旅の人は、大概小石を拾つて此の上に投上げ、一寸目礼して行く者もあれば、また丁寧に合掌し、礼拝して行く者」もいる。

「迷信深い」朝鮮の風習のなかでも、特に久留島は、「産児」に対する朝鮮の迷信に注目する。子供のない人が祈りをして子供を授かり、出産するまでのありさまを次のように詳記する。

祭期は、普通が三日間で少し丁寧なのは七日間、凝つたのになると百日位山中にこもつて祭る。祭る前には齋戒沐浴して身を清め、新裁の衣を着け、大概巫女か盲人を同伴して行く。「此は主に京城の巫女と盲人だが、田舎の方の盲人は鈴に代て太鼓を叩く。それで神に捧る供物は如何な物かと云ふと、規定としては、米飯に和布汁で、これに蜂蜜で拵へた蠟燭の黄色い物と、白紙三枚を携へて行く。そこで此処に神居ますと思ふ所に前記の米飯と和布汁を並べ、その前に黄蠟を点して、如何か好き児を授けられる様に祈る。祈り終れば白紙三枚を一枚々に巻いて、其に火を点じ、右の手に持つて、次第に指先きまで燃了るまで持つて居る。此の時此の紙の燃えた灰が、風に連れて空中に騰る高さによつて、出来る子供の運を卜ふ。乃ち其の騰る事

高ければ高いだけ、好いと為てあるのだ」。

朝鮮には産婆がないこと、産着に必ず男親が着ていた古衣を仕立て直して着せることなど、日本と比較しながらその違いを語る。また、胞衣は三日間産室の内に大切に保存して置き三日目に焼くこと、胞衣を焼く時は家族が総出で周囲に立ち塞ぎ、焼けてしまふまで嚴重に守つて居ることも紹介する。朝鮮では胞衣が「陰虛火動」という肺病の特効薬として知られているため、子供が生れるとこの胞衣を盗みに来る者が少なくないからだとその理由を説明する。

目出度く安産した後、生れた子が男の子であれば、門口に七五三縄を逆にねじつて、このねじり目に一つ置きに唐辛子と炭とを挟んだものをかけ、女の子ならば唐辛子に代えて松葉を挟む。それから三日間は非常に注意をすると共に、子供の守り神と信じられている「三神」を祭る。久留島はこの「三」という数字と朝鮮の子供の關係に非常に興味を示し、「胞内に居る時は、出産の三箇月前から特殊の注意を払はれる。生れて三日間は特殊の時間として聖別される。生れ々ば直ちに守り神として三神が附いて居る。そこで此の三神に捧げる供物が相変らず選米の飯と和布汁だが、これが何れも三椀宛、(それで生れた子供が三つ目で、三つ口で、三つ指をついてお辞儀を為たらば、何も彼も三つ尽しで斯云ふところから、三韓と名を附けたのか如何だか其はわから無い)兎に角、三つと云う数が關係する」と述べる。また、「三」という数字と子供との特殊な關係は、朝鮮一国に限らないもので、日本でも欧州でも米國でも子供と「三」の特殊な關係が共通に

認められることを指摘する。この問題については、後一九三六年に『児童』誌を借りて、「世界共通の童話数詞『三』といふ」或は三度くりかへされるのことは、要するに稚き頭脳に、最もよく明確に考へられる『多く』の意義を代表するものと見て差支へない⁽¹⁷⁾と述べ、東西古今を問わず「数」を代表する手早い解釈が「三」であると説く。

このように朝鮮の産児風習を観察した久留島が、その次に注目したのは、朝鮮児童の遊び文化であった。帰還する直前に『少年世界』（二巻一四号）に寄稿した「朝鮮児童の遊戯」には、朝鮮児童の玩具と遊びについて紹介している。文章の最初には、日本が子供に触感の満足を与えるためにしゃぶりこを握らせるのに対して、朝鮮は、子供の上着にある紐付けの所に結びつけて、子供が動くたびに鳴らす小鈴以外には最初期の玩具なるものがないと述べている。次に紹介される玩具は、篠笛である。

「この笛が朝鮮児童にとつては、尤も共通で、又唯一なる児童期の玩具と云ふも差支へ無い」と記す。それに、京城と釜山あたりでは紙鳶を揚げる子供がいること、夏はあまり見かけないが、冬川に氷が張ると独楽を氷の上でまわす地方もあること、女の子がほうづきを鳴らしていたことが紹介されている。また玩具に続き、朝鮮児童の代表的な遊戯としては、ブランコ、ノルティギ⁽¹⁸⁾、トンチギ⁽¹⁹⁾などが紹介される。

久留島は、「鈴と笛と紙鳶に独楽、以上三つの他は如何に注意して見ても、玩具と云ふやうな物を見当らぬ。朝鮮の児童が楽しみの道具と云ふは、此以外には全く無いやうである」とい

い、朝鮮の玩具について「至って数が少ない」と語る。同じように数が少ない遊戯のなかで、朝鮮各地に最も共通しているブランコについては、「吾国の子供などが造る一寸懸と違つて、大人が助けて思ひ切り高い枝」から、「途方も無い高いものを懸けて、その高ければ高いだけが自慢であるらしい」と語っている。ノルティギについても、「如何にも熟練したもので、殆どこれが遊びとは考へられぬ」という感想を述べる。

要するに、久留島の目に映った朝鮮の児童は、鈴と笛と凧と独楽以外に楽しみの道具といえるものを持たない。その上、数の少ない遊戯は、子供の遊びとは思えない危険性を有し、子供に熟練した技術を要求するものであった。仁川で一五ヶ月、咸鏡北道で五ヶ月を過ごした久留島は、一九〇五（明治三八）年一〇月、朝鮮の児童が「遊戯を為し楽しんで居るのを見る事は極く稀である」（「朝鮮児童の遊戯」という印象を残し、朝鮮を後にする。

満州に進んだ久留島は、遼陽にしばらく滞陣した後、沙河に駐屯している時休戦を迎え、一九〇五年一月一日、帰還する。日本に戻つて四、五日の休養後、さっそく中央新聞社に復帰し、同年一月三日創刊した中央新聞社の日曜附録「ホーム」の編集長を務める。そして翌年の三月四日「お伽倶楽部」⁽²⁰⁾を発足し、一七日に神田美土代町の青年会館で第一回の「お伽講話会」を開催するのであった。演劇も映画も放送もなく、子供のための文化財といえるものが乏しかった時代に、子供のための文化センターとなつた「お伽倶楽部」による「お伽講話

会」には、口演だけではなく、童謡や琵琶の演奏、奇席芸の太神楽、子供向けの手品など、多彩なプログラムが工夫された⁽⁹⁾。

この「お伽俱樂部」による催しは大盛況で、その後毎月一回開かれ、七年間も続いた。また、久留島は、講話部主任として博文館に入社（一九〇六年九月）し、『少年世界』、『少女世界』の主干をしていた巖谷小波とともに地方愛読者会を巡回、口演を行う一方、お伽俱樂部の支部を各地に手掛け、精力的に児童文化事業を全国に広げていった。帰還後、わずか一年も経たないうち成果であった。

ここで、久留島が初めて試みた「お話の会」から「お伽俱樂部」に向かう途上に立ち寄った、「朝鮮」という場を想起してみたい。

余は嘗て初めて朝鮮に行つた時、大道で子供が遊んで居るのを見た、お前は幾歳かと聞くと、十歳だといふ。成程まだ遊び盛りの子供、たと余が云ふのを聞いて彼は沸然として恐つた。子供ではないぞ頭を見る！といつた、彼れは頭髪を上げ冠を戴いて居る。所謂チヨンガーが髪を括り下げて居る姿とは異つて居るのに気がついた、(略) 彼等は大人と子供とを分つのに年齢の差異、発育の順序によらずして、頭髪の上げ下ろしによつて見分ける。之れは同時に妻の有無を標榜して居るのださうな。チヨンガーは頭髪を下げて妻なきを語り、妻あるものは髪を上げて冠し、ネンガミといふ。ネンガミは年齢の多少によらず、既に一人前の韓国

民として取扱はれる⁽¹⁰⁾。

この文章は、一九一〇（明治四三）年、久留島が「家庭」に寄稿した「朝鮮の子供」からの引用である。ここには、久留島が始めて朝鮮の児童に触れた時の体験が綴られ、その体験のもと、久留島が受け止めた朝鮮の児童観が語られている。久留島は朝鮮の児童観について、次のように語る。「日本で子供といふ言葉はいつも邪氣の無い所へ」使われる「心身共に天使に近い美しさの形容」で、「尊敬、親しみの意味」に用いられているが、朝鮮の子供という言葉、「チヨンガー」といふ其音が彼等の耳に如何に侮蔑、卑賤の意味を伝ふるかは想像の外である、殆ど人非人、人外人といふ意味に呼ばれて居る」。また、朝鮮では大人と子供を区別する基準が、年齢の差や発育の順序ではなく、頭髪の上げ下げ、つまり妻の有無によると述べる久留島は、「奇々怪々、世界に未だ斯の如きものはない」と、驚きを表している。さらに、日韓併合に至つた「韓国衰亡」の一番大きな原因をも、「韓国の家庭、特に子供に対する解釈」にあると語っているのである。

久留島が滞在していた当時、朝鮮は日露戦争の主戦場となつていた。子供が「遊戯を為し楽しんで居るのを見る事は極く稀れである」ことがむしろ当然だったかもしれない状況、そして朝鮮の伝統的な児童観に対する理解が久留島に乏しかったことなどは、事実として否めない。しかし、本稿では、久留島の描き出した朝鮮社会の描写を抽出し、そこから導出される久留島の

朝鮮児童観に主眼を置き、論を進めたことを再びことわつておきたい。

繰り返される試行錯誤のなかで「自家衝着」に遭遇し、自縛の「拘束から脱する事は出来まいかと少なからず苦しんで居」た久留島が立ち寄つた「朝鮮」という場は、「一体迷信が深い」ところであつた。その朝鮮の「児童なるモノ」とは、楽しみみの道具といえるものを多く持つていない上に、遊戯も数が少ない。その数の少ない遊戯ですら、楽しんでる姿を見かけることはごく稀であつた。それは、朝鮮には「子供といふ觀念が卑しめられ」ており、「十歳のネンガミは風上げに忙しい時内房に妻あり彼れは既に一国民也」(「朝鮮の子供」という現状に因る。そのような朝鮮を体験した久留島は、やがて「韓国民は人といふ見解を根本から誤つてしまつた」(「朝鮮の子供」と認識するに至る。久留島が体験した「朝鮮」とは、子供という概念に対する再認識を促し、児童観の確立とともに児童文化事業への「信念」に火をつける役割を果たす場となつたのである。

【注記】

1 一九一〇(明治四三)年二月、大阪の実業家、野村徳七、野村証券の創業者の支援で幼稚園建設計画。同年三月五日、早蕨幼稚園の設立認可願を提出(お伽俱樂部附属私立早蕨幼稚園)。園の本来の読みは「さわらみ」で、久留島夫人琴子が女官時代に仕えた早蕨(さわらみ)内侍(明治天皇の側室)の名前からの命名。

2 後藤惣一『久留島武彦』(大分県教育委員会、二〇〇四年三月)参照。

3 「尾上新兵衛」という筆名について久留島は、「それは要するに発音遊戯だ。其の頃少年世界に掲載した「近衛新兵」といふ標題から来たものじりだつたのだ」と書き残している。その他の筆名には、「賢垢生」「新兵衛」「尾上」「をのへ」「海上水兵衛」「そのえ」「さわらび」「タケヒコ」などがある。

4 「近衛新兵」『少年世界』第一巻一九号(博文館、一八九六年一〇月一日)、四三頁。

5 草地勉『メルヘンの語部―久留島武彦の世界』(西日本新聞社、一九七八年一月)参照。

6 サムエル・ヘイマン・ウエンライト (Samuel Hayman Wainright) 一八六三(一九五〇)は、大分中学校の後、関西学院、青山学院に勤務。大正元年に教文官の前身である日本基督教興文協会を創設し、銀座の教文官ビルを建設する。東京米人協会会長と日本アジア協会会長を務める。主著には『ヨハネ伝注解』がある。昭和十三年一月帰国するまで五〇年間滞日した。

7 久留島はW・R・ランバスによつて洗礼を受けた。ウエンライトは平信徒だつたため、ランバス総理のように教職資格のある人物が洗礼式を執行了した。

8 村上謙介『ウエンライト博士伝』(教文館、一九四〇年七月)、四〇頁。

9 福川一徳『久留島藩士先祖書』(文献出版、一九九二年二月)参照。

10 この問題に関して久留島のいくつかの略伝は、久留島が側室の出であつたことと、祖父死去の時まだ久留島があまりにも幼少で無頓着であつたためであると記している。草地勉、前掲書、参照。

11 生田葵『お話の久留島先生』(相模書房、一九三九年二月)、五六頁。

12 久留島の戸籍簿には、一九〇二年三月四日結婚届が出されており、同年三月五日が入籍日となっている。これは、同年三月一日生まれた長女の誕生をきっかけに結婚届や入籍をしたことと推測される。『玖珠郡史談』一四号（玖珠郡史談会、一九八四年八月）参照。

13 生田葵、前掲書、七三頁。

14 第一回の「お話の会」には、横浜劇場で「椿姫」を上演していた川上音二郎が、横浜貿易新聞の社会部長であった久留島に記事を頼みに来ていた。「お話の会」を見た川上は、久留島にお伽演劇を提案し、これがきっかけとなって同年一〇月四日、東京本郷春木町にあった本郷座で日本初の「お伽芝居」が公演される。富田博之『日本児童演劇史』（東京書籍、一九七六年八月）参照。

15 生田葵は、この時期の久留島について「その間に彼は戦塵と題して戦争小話を少年世界に前同様殆ど毎号書いてゐたものの、漸次本来の面目に返つて童話を作りたい心地になり、先づ手初めにグリムのメルヘンを訳したり、それからその他の外国のメルヘン作者の作物を読破するのに余念がなかつた。」と述べる。生田葵、前掲書、六五頁。

16 久留島生「陣中の重喜会」（『基督教世界』一一五六号、一九〇五年一月九日）

17 「子供の心の発育とお話の取扱ひ方」『児童』四卷一号（日本児童社会学会、一九三六年一月一日）

18 シーソーに似ているが全く別のもの。藁の束や、穀物の入った袋などを置いて、その上に細長い跳ぶ板を置く。板の両端に乗った二人が交互にジャンプをするのだが、相手が落ちてくる力を利用すれば高さ数mも飛び跳ねることができる。

19 「トンチギのトン」は乃ち錢で、其の遊ぶ方法は一人一文ずつを出し、籤を抽て順序を極め、かくて円型の石をとつて先づ手中の錢を投げ、それより決められた後方に立つて右の石をその一文錢の上に投るので、命中すればその錢を所得とするのである。久留島武彦「朝鮮児童の遊戯」（『少年世界』一一卷一四号、一九〇五年一月一日）

20 久留島による最初の「お話の会」は一九〇三年七月一日に開かれているが、このときには「お伽俱樂部」という名称は使っていなかった。富田博之、前掲書、五六頁。

21 富田博之、前掲書、参照。

22 「朝鮮の子供」（『家庭』二卷一、一九一〇年一月一日）（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）